1994.2.15

舵輪

VOL.12

鏡開き

開かれる

さる一月一六日（日）、ボランティア主催、財団後援の鏡開きが行われました。一月としては希にみる快晴の下、鏡開きが行われ、ボランティアの皆様の手によって船内各所に飾られていたお鏡餅は、ぜんざいとして一般見学者等にふるまわれました。

この鏡開きも今年で四回目。餅つき大会と並んで、ボランティア主催の年中行事としてすっかり定着し、ローカルニュースでもお馴染みとなっています。

RCヨットレース

開かれる

鏡開きの日、舵輪一一号でも紹介がありましたように、ボランティア有志主催のラジコンヨットレースが開かれました。

詳細はボランティアでもあり、大会実行委員長でもある松井さんから投稿をいただきましたので、ご覧ください。

チョッサーからのお知らせ

①セイル作製について

今期のセイル作製作業が、予定どおり一月二二日から開始されております。昨年参加されたベテラン？の方、また今年からの初心者マークの方が入り交じり、和気あいあいの作業をすすめております。まだまだ間に合いますので、奮ってご参加ください。（週末毎の雪のため、昨年より少し作業が遅れ気味です。何とか3月のベンディングに間に合わせたいものです。）

②展帆ボランティアの募集について

海王丸の富山永住に向けての準備は、着々とすすめられております。それを踏まえて、来年度も新規のボランティアを募集して皆様お仲間を増やし、大勢で楽しく、そして少しだけ楽をしたいと考えております。

そこで財団では、今年から募集用のポスターを作製し、広く勧誘をすすめることにいたしました。

ポスターは総帆展帆時の海王丸の姿をベースにしたもので、二月一四日完成予定です。

募集は三月から開始いたしますので、皆様の職場あるいはご近所の公共の場等への掲示が可能であれば、ご協力下さるようお願いいたします。

（二月中旬以降、海王丸パークの近くへお越しの際、財団事務所にお声をかけて下さい。来年度は募集は一回だけですので、よろしくお願いいたします。）

③「あこがれ」運航スケジュール等について

帆船「あこがれ」を使用する大阪市のセイルトレーニング事業がいよいよ開始されることになり、説明パンフレットおよび申込用紙を財団で入手いたしました。必要な方は直接財団業務課まで。

なお、四～六月の運航スケジュールを同封しますので、参考にしてください。

RCヨットレース・海王丸カップ

＊結果・観戦レポート＊

去る一月十六日、日頃のおこないが良かったせいか、青空とよい風の中、第一回RCヨットレース・海王丸カップが行われました。

それでは艇長とボートの紹介

ボランティアから

井黒一雄 NO.7
タミヤ・ヤマハ・W60
大川雅永 NO.24
ヤマハ・W60雅子さま号艇
岩田大心 NO.4
ヤマハ・W60（借り物）
中谷明 NO.78
荒木高文組 NO.2
自作木製ヨット
牧野友美 NO.208
ヤマハ・W60
松井吉富 NO.242
ヤマハ・W60

海王丸乗組員から

藤井チョッサー
カップレーサー914
川路セコンドオフィサー
カップレーサー914

特別ゲスト富山RCヨット協会
山村稔さん

とで、戦われた。

コースは海王丸船首側特別コース

ブイを三角に打ち反時計回りに、二周するものとした。（これが実に絵になるんだ。）

レースは一レース四艇で競い合い、上位二艇が二回戦に進み第二回戦上位二艇で、決勝戦を行い、チャンピオンを決めた。

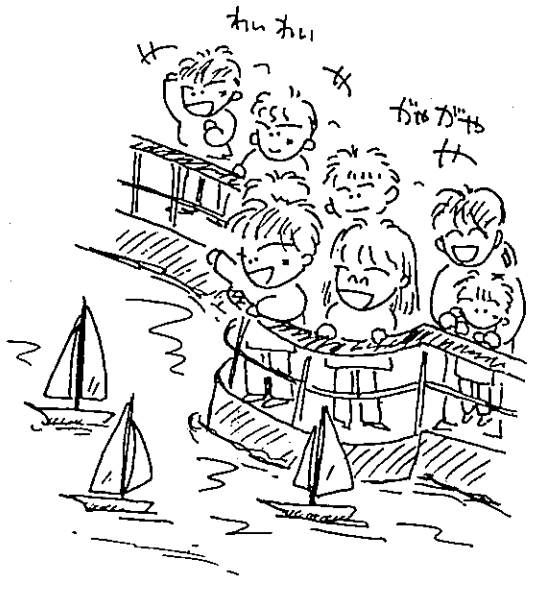
第一回戦A組
一位・川路艇　二位・大川艇
一回戦ボーイ井黒艇　牧野艇

第一回戦B組
一位・藤井艇　二位・山村艇
一回戦ボーイ岩田艇　中谷艇

第二回戦　早くも準決勝
一位・大川艇　二位・山村艇
二回戦ボーイ川路艇　藤井艇

そして決勝戦
優勝・山村艇　準優勝・大川艇

という結果になりました。残念ながら決勝に進んでボランティア代表となった大川君は、惜しくも決勝戦で破れました。



この日鏡開きそっちのけでレースの三時間前から練習をしていた人が多数いた。すごいやる気である。

（餅はしっかり食べたらしいが）

レースの雰囲気としては第一回目と言うこともあり、始めのうちはほのぼのしていたのに、だんだん熱くなり口で脅迫（？）していた人もいた。

たとえば

某チョッサ「オーイ、明日から仕事増やすぞぉ。」

某川路「エー、そんなぁ。」

と言って攻撃をしていた人がいた。（あくまで某ですよ）

そして表彰式と閉会式が行われ、そのとき財団の勝山理事の挨拶の中で

「次回は財団からもなにか賞品を用意しましょう。」

と言う言葉があった。

初めはチョットした一言から始まり、それが

「いいね、やろうよ。」

とたくさんの人から言われ、いろいろな人に協力してもらい、今回のレースになり、新たに賛同者が増えて、ここまで来たらずうっと続けたいと思うのは、決して自分一人だけでない、と思うのである。

レースが終わり記念撮影をした時ヨットを全部上げ並べたとき、これが結構壮観なものがあった。

それともう一つ、場所的なのかもしれないが、ギャラリーが予想以上に多く、小さい子供からお爺ちゃんおばあちゃんまで幅広くヨットの近くまで来て見たり、イロイロと質問する方がいたようだ。

（単なる、物珍しいだけかもしれないが、興味を持ってくれただけでも、いいんじゃないかな？）

ちなみに翌日の北日本新聞に二十面に写真付きで載っていた。

では、第二回大会をお楽しみに。

PS・レース結果のところにオ

イラの名前がないのは、レース前にラダートラブルと電波の混信があったためにリタイヤしてしまったのだあー、くやしいー！。

第一回大会の言い出しっぺ
ミズンマストのメガホン
松井　でした

忘れ

ボランティア　横田　叶男

「とかくメダカは群れたがる。」あの群れのことです。私の経験した群れとの遭遇！。時代は遡ること五〇と数年、場所は南樺太、その頃はレッキとした日本の領土で、世界地図で赤く塗られていた。その南端部で、ちょうど「鮭」のシッポの形をした湾になっている「亞庭湾」と言った。私はここで二シーズン漁労に従事した。

春のたて網漁が終わって、夏の地引き漁となる。ベテラン船頭の眼には魚影がわかる。その色によって群れの厚さ、量までも。船頭は、目のつけた魚群の上に位置して「網下ろせ。」の合図をする。二艘の網船は船頭船を大きく取り巻くようにして網を打つ。漕ぎ手も網の打ち手も、死にもの狂いだ。一秒を争う競漕である。魚との、そして他船との。

二艘の網船は息せきって網に結ばれたロープの端を岸の引き手に渡す。岸では「ロクロ」で網を引き寄せる。船頭船は網の中央にあって「西だ！。」「東だ！。」と云って網の張り具合を看視する。網が左右均一に張られていないと、折角の魚が逃げてしまう。群れは先頭の一匹が逃げ道を見つけると瞬時に群れ全体が居なくなってしまう。

小一時間、こうして魚群を囲って垣網の先端が岸に届く頃は網に囲まれた百米競争の運動会場程の場は、水の色じゃなく一面魚色だ。右往左往する魚群によって水面は渦巻、泡たっている。もう少し網をしぼり込む。魚等は身動きも出来ない儘にその圧力で網の下が浮き上がる。そこからはみ出されて逃げる魚、又、圧力で網が沈む部分が出来る。そこから放り出されるようにして逃げる魚、人も魚も益々エキサイトしてくる。

こうなると岸で網を手繰ってなどいられない。着衣その儘、我先に、と海に渡り入って垣網の下部を足で押さえ、上部を肩に乗せて、中の魚の逃亡を阻むのである。正に魚群との格闘である。魚圧に逆らって、立っているのがやっとである。

それほどに魚の豊富な海であった。北の海の鰊漁の一こま。

ジガーの老青年。

シリーズ「海の英語」

今回は、weather という言葉についてです。

もちろんこれは「天候」に該当する英語ですが、語源的には風や暴風を意味する古代英語の weder から来た言葉なのだそうです。風と言えば我々日本人はすぐに wind を連想するのですが、本場では weather and wind という成句も使われているそうで、この場合の二語は全くの同意語の繰り返しとして用いられています。

皆様の若き日々の思い出に登場する（今も若い！？　失礼しました。）エミリー・ブロンテの名作「嵐が丘」の題名は、Wuthering Heights というのだそうですが、wuthering がこの作品の舞台となったヨークシャー地方のなまりで、本来 weathering が正しいとすれば、邦訳の正確さが理解できます。

さらに weather が風を意味する明確な例として、風見鶏という語があります。これは決して wind cock と言わず、weather cock と言います。

さて、海上ではむしろ weather は風の意味として圧倒的に用いられます。それも風上の意味で使用します。船内の標語で「風上風下、天国地獄」とありますが、その風上が weather です。ちなみに風下を lee と言います。海上ではもっぱら、weather side（風上舷）、weather helm（風上舵）のように用いられますが、さらに海王丸では、weather wheel という手動操舵時の風上側の操舵員を意味し、風見を見ながら風下側の操舵員に支持をする重要な役目を表します。また本来 lee side は風下舷を意味しますが、これとは別に気象観測をしたり、時鐘を鳴らしたり、伝令になったりする一種の雑用係も意味します。これは彼らの待機場所が甲板上の lee side であることから来ているようです。

もともと風を意味した weather が、広く天候一般を意味するようになった訳ですが、これは余談ですが似たような例が日本語にも見られるそうです。

すなわち「風習」「風情」「風土」「風潮」「家風」といった語がそうで、これらは風から社会生活一般を形成する「雰囲気」を意味するよいになった例だそうです。

weather についてまとめてみましたが、間違っても「今日のウエザーは東かな？」などとは言わないで下さい。「あの人海王丸に行くようになってから、ちょっとネエ。大丈夫？」などと言われるのがオチですから。

さて約一年間続けてまいりましたシリーズ「海の英語」ですが、ついにネタが尽きてしまいまして、今回で終了させていただきます。少しは知ったかぶりができましたでしょうか？ご愛読？ありがとうございました。

（藤井）

あとがき

今年の鏡開きは快晴に恵まれ、用意したぜんざい、豚汁は午前中にはなくなってしまう人気でた。

また、当日の海王丸乗船者数は一〇〇〇人を超え、冬季の乗船者数としては、異例の多さでした。これも、海王丸が県民の皆様に親しまれてきた証ではないか、と考えます。

今回、若手ボランティア主催のラジコンヨットレースが行われ、しばし見学客の注目を浴びていました。

翌日の北日本新聞には、鏡開きよりも大きく取り上げられ、ご存知の方も多いかと思います。

アメリカやオーストラリア等では、どこの港でもきちんとしたヨットハーバーが整備され、誰もがマリンレジャーを仕事の後のひととき、楽しむ事ができます。日本は経済面では一流ですが、こういう余暇を楽しむという面では、彼らの足元にも及ばない、というのが船乗りとしての実感です。

ここ富山でも、海王丸を中心に、少しは人々の目が海や船に向き始めている、と考えるのは手前味噌でしょうか。

誰もが海や船を楽しめる時代が、ここ富山から始まれば、と考えます。（非常に大袈裟？）

（望遠鏡）